

雲レーダの運用を開始

●地球水循環研究センター

地球水循環研究センターは、今年9月より、積雲や巻雲内部の気流構造や雲粒子分布を連続して観測することのできる「雲内部構造観測用 Ka バンドレーダ（雲レーダ）」を環境共用館屋上に設置し運用を開始しました。この雲レーダは、平成24年度補正予算によって今年3月に導入されたもので、試験観測を経て9月より連続観測を行っています。



環境共用館屋上に設置された雲レーダ

ます。この雲レーダは、平成19年に導入された水循環観測マルチパラメータレーダシステム（Xバンドレーダ）に比べて短い波長の電波を用いることで、雨や雪といった降水粒子よりも小さな雲粒や氷晶粒子を観測することができます。雲レーダとXバンドレーダによる同時観測を行うことで、積乱雲が発達する前の雲の構造の時空間変化や、雲内に降水粒子が形成される過程を観測できる見込みです。また、偏波機能を用いて巻雲内部の氷晶粒子の形状などの推定を行うことで、放射過程を通じて巻雲が地球環境に与える影響を推定することができると考えられます。

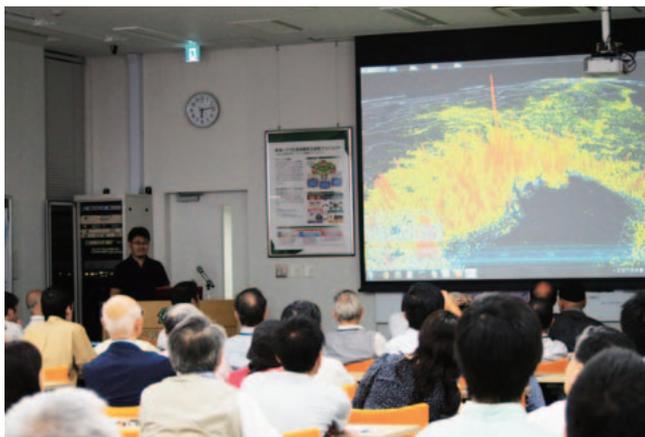
今後は、名古屋周辺での雲の観測に加えて、冬季の北海道や北陸地方における雪雲内の氷晶粒子を対象とした観測や、九州や沖縄における梅雨前線帯の降水システム内部の雲粒子の分布、台風外縁域の雲物理特性などの観測を実施し、雲・降水過程の解明を行っていきます。

第103回防災アカデミー開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、9月16日（火）、減災館1階減災ホールにおいて、第103回防災アカデミーを開催しました。今回は、NHKの阿部博史氏による講演「震災ビッグデーターいのちの記録を未来へー」が行われ、82名の参加がありました。

講演では、はじめに阿部氏から「震災ビッグデータ」に



講演する阿部氏

ついて簡単な説明があり、首都圏、津波浸水地域、原発被災地の3地域で東日本大震災時及びそれ以降に何が起きたのか、ビッグデータを利用した様々な分析結果が紹介されました。例えば首都圏では、平成23年3月11日の夜、電車が止まったことにより都心では多数の帰宅困難者が発生しましたが、同時に合計800kmにも達するほどの大規模な交通渋滞も発生していたことがビッグデータから判明しました。また、津波被災地では地震発生直後、浸水地域に戻ってしまった人も地域によっては多かったことや、企業の取引データを可視化することで、小規模な商店でさえも被災地内外と様々なつながりを有していることがわかり、大企業のみならず中小企業に対する支援も地域復興の大きな支援になると解釈できることなどが紹介されました。

参加者からは講演内容を踏まえ、災害時の情報伝達に関する質問など、活発な質疑応答が行われました。